

プラトンの国家論

今 井 直 重

内 容

1. 序 論
2. 理想国家論
3. 法治国家論
4. 政 体 論
5. 正 義 論

1. 序 論

プラトン (Platon BC. 427-347) のもとめた国家は、力としての国家、物としての国家ではなく、道義・正義の実現者としての精神的な国家であった。物質的繁栄のごときは、それ自体国家生活の目的ではなかった。それゆえに、プラトンはアテナイの著名な政治家カリクレス、アルキビアデス、キモン、テミストクレス、ミルティアデス、ペリクレスについて「彼等は国家を充たすに多数の港湾・船渠・収入・及び一切のそのようなものをもってし、正義及び節制の存する余地をなからしめた。これまでにアテナイにはよい政治家は一人もいなかった。」とのべている。

(ゴルギアス篇, 503b)

ペルシア戦争の英雄も、アテナイの海上覇権の創設者も、プラトンにとっては、すぐれた政治家ではなかった。物質力や軍事力は増大されたが、正義と道義が国家から消滅したからである。

「国家の崩壊は決して外部的な力によるのではなく、理性を失った、狂気じみた衆愚と、飽くことなく物質を追求する権力者、正義と節制を忘れた国民、すなわち、道徳的精神の欠如が、国家の混乱と危機の原因である。(ゴルギアス篇, 503c)

道徳的精神のない国家は空虚な形骸であって、自ら没落すべき運命にある。プラトンは正義を否定する現実のアテナイの没落を救済して正義の支配する理念国家を実現しようと考えたのである。

プラトンにとっては、イデア (ἰδέα) は墮落を防止して人間を救済する力である。イデアはそれの久遠の光明によって人間にあこがれ (Sehnsucht) を感ぜしめ、それよりの逸脱を防ぎ、ひたすらそれへの追求をなさしめるものである。イデアへの無限の追求がエロース (ἔρως) である。イデアは価値の根源であり、人間生活の規範的存在である。イデアは決して神秘的な存在ではなく、人間の理性の眼によって捉ええられる合理的な存在である。(Windelband, Geschichte der Philosophie, S.107)

哲学者は善 (ἀγαθός) のイデアをロゴス (λόγος) によって認識し、これを国家のうちに実現する道を発見しなければならないのである。哲学者はイデアを思慕し、これを実践する情熱を有しなければならない。イデアの実践は人間の救済であり、人間への愛情である。人間救済と人間

愛こそ、人道主義の本質である。哲学者は人道主義者でなければならない。プラトンは人間愛と人間救済を窮極の目的とした愛の哲人であり、人道主義者であった。しかして、人間救済はポリス（*πόλις*）生活においてのみ可能であると考えた。ここに、プラトンのポリス的人間学的倫理が生誕する。

人はポリス的存在である。ポリスは人間の存在の基盤としての共同体であって、それ以外に人間の社会も生活もあり得ないのである。これについてプラトンは「私達の誰一人として、私達自身のために生れた者はない。私達の存在は、私達の国家に、私達がたずさわる限りにおいて、何等かの意義を有する。」とのべている。（書翰，IX, 358a）

全市民がポリス的な存在である。ポリスを離れて個人を考え、個人を離れて社会を抽出することは、近代自由主義の論理的抽象観である。プラトンにおいては、具体的彫塑的なギリシアの国家観・人間観に立脚して、個人も、その思想も、よって立つ基盤が国家であることが自覚されていた。哲学者も哲学も、論理の遊戯をするために存するのではなく、国家における何ものかとして、その存在の意義を有するのである。しかして、国家は善のアイデアの具体化せるものでなければならないのである。プラトンの哲学のすべては、善のアイデアを具体的に実現する理想国家の建設に奉仕すべきものであった。しかし、現実のアテナイの国家を見るときに、決して国家が善のアイデアを実現せるものであるとは考えられなかった。というのは、プラトンの師、哲人ソクラテスをして毒杯を仰がしめるがごときアテナイの国家は決して善のアイデアの実現せる国家でもなければ、正しい国家でもなかった。そこで、プラトン哲学の目的は善のアイデアを欠ける、正しからざる国家を、善のアイデアを実現する正しい国家に進めることであった。

プラトンは理想国家の冒頭において次のごとくのべている。すなわち「現実の国家においては不正なるものが栄え、正しいものが苦難を受けている。最も不正なることを行いながら、恰も正しいことを行っているかのごとくに振舞い、且つ神々にまで愛されているようである。神の正義さえも疑いたくなるくらいである（ポリティア，V, 330a）かかる現実の国家状態を見て、プラトンは遂に「哲人は孤高の生活に甘んじて自らを救うことだけに止まるべきではなく、更に、進んで国家を救い、国民を救わなければならない」と決意した。（ポリティア，V, 345b）かかる正義の失われた国家を救済するために、国家のアイデアとして描かれたのが理想国家である。理想国家においては、正しいものが幸福であり、正しくないものが、幸福でないような状態が実現する。かかるアイデア国家においては、現実のアテナイ国家のように、正しいものが苦しみ、不正なものが幸福であることはできない。アイデア国家は正義の実現の場であり、正義は国家の支柱であり、国家の徳である。国家が正義の実現の場であるがゆえに、そのうちにある国民を有徳ならしめることができるのである。国家は国民をその部分としてもつ有機的共同体であるから、全体たる国家が正義を実現して、有徳になることによって、その部分たる国民を有徳ならしめることができるのである。国民は有徳になることによって、幸福になることができるのである。幸福とは神（*δαίμόνιον*）と共に住み、神に適わしいような正しい生活することによってえられる魂の悦楽である。国家の目的は国民を有徳にし、幸福にすることである。国家の目的は、従来のアテネの大政治家といわれる人達がやったような、富国強兵の実現や、物質的殷盛をもって国民の欲望を充足することではない。欲望充足の国家は国民を幸福にするものではない。国民を幸福にすることができるのは、正義の国家・有徳の国家でなければならない。アテナイの大政治家といわれるアルキビアデス、テミストクレス、ペリクレスの支配した国家は、いずれも、国民の物質的欲望を充足することを目的とする物質万能の国家であった。もちろん、物それ自体は、何ら悪いものではないが、魂が

物欲に惑わされて、善のアイデアへのあこがれを忘れるから、物への執着を節しなくてはならないのである。徳の国家においては、国民の物欲を節制して、魂のうちにあるロゴスの眼を開かしめて、善のアイデアを眺め、これにあこがれを感じしめ、善のアイデアに関与し、善のアイデアを分有すること（κατέχεῖν）によって、国民を有徳にし、その道徳的人格を育成することを目的とするものである。国民の魂のうちなるロゴスが物欲を節制して、ひたすら、魂の王国であるアイデアへのあこがれを感じしめ、ダイモニオンの声が、耳に囁くときに、魂に無上の愉悦があり、人は幸福になり得るのである。

かくのごとく、プラトンの国家は、全く倫理的な国家であり、国民は道徳的国民である。それゆえに、統治者は国家を倫理的に形成し、国民を道徳的に育成することができなければならないのである。かくのごとき統治者は、自らが道徳的人格の完成した者でなければならないのである。統治者は自らの魂のうちなるロゴスが、何等欲情によって乱されることなく、むしろロゴスがよく欲情を制御して、ロゴスの眼が透徹し、明智の力を具有するにいたった哲人でなければならない。ここに正義国家における哲人政治の必要な所以が存するのである。それでは哲人はいかにして国家を正義化し、国民を有徳にすることができるのであるか。それには、一つには、正義を実現することができるような国家の組織を通して国家を正義化し、他方国民を教育することによって、これを道徳的に育成することができるのである。

〔註1〕 プラトンにとっては財力・金力・経済力は人間の社会・国家の支配的な力の根柢であってはならないのである。富と徳とは秤の両端である。一方が上れば他方が下る。富の端が下って、徳の端が上っているのが、金権政治（πλουτοκρατία）の最大の欠陥である。（ポリテΙΑ, VIII, 543c）

富についての非難は貧者からの搾取や、人民に対する苛斂誅求によるのではなく、富に心を奪われて、徳への関心がなくなるからである。魂が物慾に支配されて、ロゴスの眼が曇り、アイデアを忘却するからである。富そのものは不正でも悪でもない。富に心が幻惑されて、アイデアを忘れるから悪である。求めるべきものは正義であり、善のアイデアである。これらのものは、アイデアへのあこがれを通して求められるのである。物欲しげなる眼を物質に向けてはならない。物欲が魂を支配するようになってはならないからである。

〔註2〕 ギリシアの国家は都市国家であった。それは同質社会であり、血縁社会であった。自足自給の経済生活の上に立つ封鎖的な全体社会であった。異質社会の規範原理は強力な権力・強行法であるが、同質社会の規範原理は倫理・道義である。

ギリシア人は一方、理想主義的であるとともに、他方、現実主義的であったので、現象のうちに本質を見出し、自然のうちに、合理的なロゴスの作用を看取した。彼等は宇宙・自然の合理的な秩序とその活動の合目的性を認識した。宇宙・自然の合理主義は、ポリス内部の人間の行動を目的論的に解釈した。人は自然（宇宙理性）の意図に基づいて一定の能力を与えられ、この能力を合理的に用い、各人の願望を達成させることは、人間の使命である。国家も自然によって意図されたものであり、自然の生み出したものである。国家は合理的な宇宙秩序の部分であって、宇宙理性のほかに、その存在の正当性の根柢を求める必要がないのである。国家は人間生活における最高の政治的存在として、絶対的価値をもつ生きた有機体である。国家は個人を超えた真正の統一的団体である。（ポリテΙΑ, IX, 578b）

2. 理想国家論

プラトンにおいては、宇宙全体が秩序を本質とするように、国家も統一・秩序・調和を本質とするものである。国民全体が、われをすてて、共同体としての国家に奉仕しなければならない。（ノモス篇, X, 628c）自己にのみ奉仕する生活、また、当にあるべき自己以上のものを望む生活

は、もつべからざるものをもつ盗人の生活である。国民が自己中心に動くときは、共同体としての国家は内面的に崩壊する。他人を傷つけ、自己の我欲をほしきままにし（*πλεονεξία*）、国家を無秩序（*ἀκοσμία*）と無拘束（*ἀκολασία*）に陥れる。部分的な個体は全体との関連において、他の部分と秩序と調和を保ちつつ存在する。国民各自の生活が、国家全体に関連して、全体的調和を保たねばならない。（ノモス篇, VII, 519c）国家における各自の職域は、各自の職域ではなく、国家の職域である。それは全体的自覚（*δμόνοια*）における各人の職域奉公でなければならない。各人が恰かも交響楽において、高音・中音・低音・中間音のあるごとくに、国家という交響楽の部分音となるときに、国家全体は秩序と調和のある全体となる。（ポリテΙΑ, VI, 443, d, e）プラトンの国家における階級は財産の所有によって生まれたものではなく、また血統によって生まれたものでもない。国家における階級は国家自体が存在するための要求として、全体の秩序維持のために要請されたものである。為政者は政治に、軍人は防衛に、農工商人は産業・生産に、各自それぞれ、その職域に専念する（*τά αὐτά πράττειν*）ときに国家全体の秩序と調和がもたらされることがするのである。ポリテΙΑ, IV, 433d 個人の生活の端から端まで、国家全体の血管が脈動している。個人はそれぞれの特異な生命を通じて、全体の肢体として全体を担うものである。かくして国家は個人を通じて生ける人間（*κατάπερ ἓνα ἄνθρωπος*）である。（ノモス篇, VIII, 829a）

生ける人間が衣食住の欲望と自己の生存のための防衛の勇氣と知的能力をもつごとく、生ける人間としての国家も、物質的生産者としての庶民と防衛者としての軍人と理性に卓越した治者をもたなければならない。プラトンの国家構造論のうちには、人間構造についての深い省察が看取されるのである。

プラトンの国家における正義とは、各自がそれぞれ、自己に与えられた持場を堅持して、これに専念し、他人の職域へ介入して、他人の持場を侵さないようにすることである。国家という有機的全体を構成する各人が、国家活動の分業組織の一部を担当するものであることを自覚し、各自の階級の分限を守り、各人の階級の徳、すなわち、特殊的なすぐれた能力を十全に発揮するときに、正義が実現されることがするのである。かくすることによって、各階級の秩序と調和が保たれる。これについてプラトンは「各人が自己に適した仕事に専念して、他の領域に手をのばしてはならない。かくすることによって、自己の仕事に上達し、能率があげられる。これが正義である。」とのべている。（ポリテΙΑ, IV, 423d）

正義（*δικαιοσύνη*）とは正義の女神ディケー（*Δίκη*）の働らきであって、ディケーの神は各人への仕事の割当を掌る。各人に政治・軍事・産業の仕事を割当てて分担させ、更にその分担したものを調和し、統一する働らきを掌るのである。ディケーの女神は職域の割当調和を掌る。人間生来天分を有し、公共人格たる国家に対する各人の任務が定まっているのである。この任務をまもることが正義である。ピタゴラスによれば正義は自然の秩序に基づくものである。国家において各階級が、生まれながら与えられているところを十全に果たし、且つ各階級の活動を調整して調和を保ち健全なる有機的全体を構成するときに、正義の徳が実現される。すなわち、各人が、自己の能力に適わしい正当な地位を占めて、全力をつくしてその職分を果たし、その国家に与えるところのものと、国家から受けとるところのものとが等しい調和があるときに正義が実現するのである。各人が自己の能力に適わしい正当な地位にいないときは、調和が害われ、国家の統一が破れる。不調和は不正義であり、悪の原因である。各人が、その性質と能力に適する地位を離れると、ディケーの女神が彼を襲うて彼を破滅するのである。（アナクサゴラス断片集）ものの本性という指揮棒は調和を破った強情な楽器でも、その本来の調子に追いつもどす。かくのごとく正義の

女神は調和を破るものを追いもどして調和に導くものである。

プラトンの理想国家における階級制は、権力の分立と均衡という調和の徳・正義の実現を企図するものであると考えられる。これについてプラトンは常に、「過度の権力の集中は破壊をもたらす。過度の権力は腐敗の原因である。」と戒めているスパルタにおいては、二王制が採用され、また元老院においては、老人議員と青年議員とが混淆して組織されたことをあげて、権力の分立を企図したものであるとのべている。プラトンの階級的分立は階級的権力の分立と見ることができ、統治者は統治権を、軍人は軍人権を、市民は経済権を附与されていたのである。支配階級とされていた統治者、軍人は支配権を独占していたのであるが、全く経済権を欠いていた。それゆえに、被支配階級の市民は、支配階級たる統治者・軍人の支配が意に満たないときは、経済権を発動して、支配階級に対して物資の供給を抑制して、その反省を促がし、支配者をして、正しく支配せしめるための反省の機会を与えたのである。市民の経済的独占は、支配権の抑制機関としての意義を有するものであった。

階級制の権力分立主義の他に、更に階級の分業主義が看取される。すべて共同生活においては、人々の欲望の多様性を満足させるために分業が必要である。この分業による相互扶助の必要から、国家が発生したものと考えられる。それゆえに、各人は、それぞれの能力に応じたことに全力をつくすことは、国家にとって最も有益である。かかる分立主義の立場から、階級が生ずるのである。プラトンの理想国家における階級は次のごとくである。

- (一) 金階級、哲人、その徳は知 (*ἐπιστήμη*)、善のアイデアを認識して統治する国家の最高の権力者である。
- (二) 銀階級、軍人、その徳は勇 (*ἀνδρεία*) 対外防衛と対内秩序の維持とを掌り、統治者の補助者としては行政官吏である。
- (三) 銅階級、市民（農・工・商）その徳は節度 (*σωφροσύνη*) 国家の物質的需要の充足を掌る経済活動の担当者である。

プラトンの国家における階級は血統主義ではなく、能力主義であった。それゆえに、貴族とは血統主義の貴族ではなく、能力主義の貴族であった。生れつきの素質と教育訓練によって、有徳なるものが選ばれて、その適わしい地位につくのである。この点において、民主主義のごとく、全く何等の訓練もない候補者のうちから、不本意ながら、自己の好むものを選ぶのとは全く異なるものである。能力主義は国家活動において、力学的緊張を与えるものであり、民主主義は媚民主主義に墮する傾向となる。

国民はまず10才より20才までの10年間、体育と音楽とを主とした教育をうける。20才に達した初等教育を終了した者は、第1次の国民審査をうける。この審査に失敗した者は、銅階級の市民として、国家の経済的労務者に割当てられる。この審査に合格した者は、更に10年間、精神と身体と教育訓練を受ける。かくして、30才に達すると、第2次の審査が行われる。この審査は第1次審査よりも一層嚴重である。この第2次審査に失敗した者は、銀階級に入り、軍人として国防・国家秩序の維持・国政の補佐等に充当される。この第2次審査に合格した者は金階級の者として、哲人訓練をうける。この間においては、主として、イデア的思念の訓練をつづけ、50才に達すると、始めて統治者の資格が与えられるのである。ここに資質と教育訓練によるギリシア的能力主義が示されている。

かくして、金・銀・銅のそれぞれの階級が、それぞれの徳を守り、自己の職域に専念するとき、国家の秩序と調和が保たれ、正義が実現されるのである。（ポリテΙΑ, V, 458a, ノモス篇, VIII, 771d）

〔註3〕 プラトンは理想国家において、個人主義に対する全体主義、私有主義に対する共有主義を論じている。（ポリテΙΑ, V, 431c）これを以てプラトンが、共産主義思想の始祖であるとする論者もあるが、これは謬見であると思う。もちろん、ギリシアにおいて、プラトン以前に、共産主義思想があった。すなわち、「金といわず、土地といわず、およそ人の所有するものは、皆共有であり、自由に使用すべきである。」（アリストパネス論集）しかし、プラトンにおける共産主義は、支配階級たる統治者と軍人に限られ、一般市民には要求されていないのである。統治者と軍人は経済権を有しない階級であって、すべての経済的援助を市民階級に負うものである。それがために専心、私を無にして公に奉ずるためには、私有財産も家族も考えてはおられないのである。正しい国家においては、国民、特に支配階級は国家の運命を自己の運命として担はなければならないのである。かくして公共精神に徹するために、私有欲を遮断する方法として、私有なき国家構造を考えたのである。その当時、ピタゴラス教団においては、教徒のものはすべて共有物とされていた。またスパルタにおいては、土地は市民が私有していて、自己の奴隷を使って耕作していたが、生産物はすべて市民の共同食卓（*συναιτή*）に供された。ドーリア人のクリート島においても、各共同体は、その公有地を公有の奴隷に耕作せしめ、その生産物はすべて国民に供給された。しかし、プラトンにおいては、共有思想は我慾を止揚して、公共精神に徹せしめるためであった。共産主義のごとく物欲より出発して、物をめぐって斗争をし、物をかちとり、物を所有（共有）することを企図するものではなく、物をすっきりと放棄することであった。プラトンの共有思想はアイデアの看取という、高い精神的所有のために、物欲を放棄することを意味するのである。プラトンの思想は魂の浄化（*καθάρσις*）への道であって、唯心思想である。共産主義思想は物質への道であって、唯物思想である。唯心思想と唯物思想とは非関連的である。共産思想は唯物思想であって、階級の排除、権力の死滅、経済的平等の確立、すべてのものの共同所有、権力なき社会の実現を目的とする。共産主義は物欲の精神から発生したのである。私有制度に対する反抗、すなわち、もたないものの、もつものへの反抗から生まれた。無産大衆の有産者に対する怨恨から奔流した物欲精神の満足への要求である。プラトンの共有思想は物欲精神の抑制である。魂を浄化するために、物欲を節制する禁欲精神の発露である。階級は魂の階級であって、財産による階級ではない。プラトンにおける支配者は全く経済力を喪失した精神的貴族であって、血統的貴族でもなければ、近代国家におけるブルジョアでもない。一般市民たる第三階級は経済力を把握している経済人であって、社会主義思想の根柢をなす生産手段を奪われた無産勤労者ではない。この点において、プラトンの共有思想を近代の共産思想と関連づけることは不合理であり、不可能といわねばならない。更に支配階級における婦人・子供の公共性は優秀な国民を生誕し、その能力に応じて、国家が計画的に、適切な教育を施し、すぐれた統治者を育成することが目的とされていた。（ポリテΙΑ, IV, 438c）婦人の公共性については乱婚を思わせるものがあるが、これは乱婚ではなく、優秀なる民族を出産するための、性関係における優生学的国家管理であった。子供の素質を向上するために、教育は既に出産前に始めらるべきであると考えた。優秀なる子供は優秀なる男女から出生する。婚姻するいかなる男女も、精神も身体も、健康状態においてなければならない。婚姻には健康証明書を必要とし、健康状態でなければ、子供の出産は許されなかった。出産年齢は男子30才より45才、女子は20才から40才の間に制限された。また婚姻は国民の義務とされ、35才に達して、なお婚姻しないものには独身税が課せられた。（ポリテΙΑ, V, 459b, ノモス篇, VIII, 772e, 773a）

3. 法 治 国 家 論

プラトンは、国家の歴史的変遷を説いて、次のごとく述べている。

(一) クロノスの神の時代、この時代においては、神が全智全能の力をもって万物を支配したので、神の政治はあったが、人間の政治はなかった。従って善のみあって、悪の全くない、天国の楽園の時代であった。

(㉒) ゼウスの神の時代、この時代にいたって、天国の楽園の時代は去って、悪が芽ばえはじめ次第にはびこり、無秩序と不調和が生じてきた。諸悪に満ちた地上の時代に転落したのである。

（ポリテΙΑ, X, 613a, ノモイ篇, III, 681b）

(㉓) 理想国家、プラトンの理想国家はクロノスの天国を再び地上に建設せんと企図したものである。プラトンによれば、理想国家は法の制限を受けないで倫理的政治が行われる国家である。すなわち、倫理と政治との間に法の介在しない国家である。理想国家とは法を必要としない国家である。法は統治者の恣意を制限して、政治の面において、その不正を防止する役割を果たすのであるが、統治者が哲人であれば、哲人は公共性に徹しているから、その意思は公意であって、私意ではないから、恣意も不正もなく、法に優る知恵によって統治を行うのである。それゆえに、哲人の統治は全く純粋であって、法の介在すべき余地がない。法の媒介なしに、徳が直接に政治に行われる最善の国家である。プラトンは、哲人教育によって育成された哲人が治者となれば、必ず最善の国家が地上に実現されるものと考えた。それゆえに、ソクラテスの死後、世界各地に、かくのごとき理想国家建設の地を求めて巡遊した。西紀 391 年南部イタリア、シシリーに遊び、ピタゴラス学徒と交わり、またシラクサの朝廷に赴き、ディオニシオス一世の義弟ディオーンと相識り、理想国家建設について意見を披瀝した。しかし、ディオニシオス一世の意に触れて虚待され、387 年一たびアテナイに帰り、郊外のアカデメイア学舎において哲学の研究に従事した。シラクサにおいてはディオニシオス一世が死去し、その子ディオニシオス二世の慫慂に従い、その国政を輔佐することになったので、理想国家実現夢を抱いて、再びシシリーに赴いた。しかし、事志と異なり、アテナイに帰った。その後 361 年ディオーンとディオニシオス二世との紛争の調停者として三たびシシリーに赴いたが、理想が実現されることの不可能なることを知り、断念して帰郷した。かくして、プラトンはかかる理想国家の実現は現実には困難であることを知って、遂に法治国家の建設を説くにいたったのである。

(㉔) 法治国家・理想国家の構想が現実に実現することが不可能であるから、換言すれば、統治者に適わしい知恵を有するところの、純粋に公意に徹した哲人を得ることができないので、倫理と政治との間に法の介在する国家が必要となってくる。これが法治国家である。法治国家においては、人の支配に代えるに法の支配をもってする。統治者は哲人のごとくに絶対に正しい統治を行う知恵を有しないので、正しい法規範の規矩に準拠して、統治者の恣意を制限し、統治を行うのである。知恵を有しない統治者の恣意を法によって制限しなければ、倫理を政治において、実現することができないからである。倫理を政治において実現するために、統治者の恣意によって権力の濫用のおそれある場合には、これを抑制するために法が必要とされるのである。倫理を政治において実現するために、何ら法の媒介を必要としない国家が理想国家（第一国家または正義国家）であり、倫理を政治において実現するために法の媒介を必要とする国家が法治国家（第二国家または次善国家）である。法治国家は最上の国家ではないが、最上の国家につぐよい国家であり、法規範にもよらないで、統治者の恣意によって統治の行われている恣意国家よりも遙かによい国家である。すなわち、法が哲人の知恵に代って統治者の恣意を抑制するのであるから、法治国家においては、法が絶対的の権威をもつのである。

(㉕) 恣意国家（専制国家）、統治者が自己の恣意によって統治を行う国家が恣意国家である。統治者の恣意を抑制するための法が必要であるが、統治者の恣意抑制者としての法規範の存しない国家である。すなわち、統治者には、哲人のごとき知恵がないにもかかわらず、（知恵は法以上であるから、法を必要としない。知恵は法よりも正しく、法よりも普遍的である。）統治を行うのに、

法によらないで、統治者自身の恣意による国家である。それゆえに、倫理と政治とが法という媒介者なく、全く遮断されている国家である。

〔註1〕 プラトンは哲人は法によらず、知慧（*σοφία*）によって国家を統治するという。政治家は法（*νόμος*）によって国家を統治する。ここにプラトンにおける理想国家と法治国家との差異がある。知慧は法に優越する権威と力を有する。知慧は国民を悪より防ぎ、善良ならしめ、正義を実現するために、その場合に最も適わしい（*μέτρου*）時機を得た（*καρπός*）当にあるべき（*δέον*）ことを知る能力である。すなわち、超越的理念としてのアイデアを直観によって分有するときに直覚知としての知慧が生ずるのである。アイデアを、魂のうちなるロゴスによって、分有することによって生ずる思惟知（*διάνοια*）であり、理性知である。統治者が正しく統治を行う知慧を有しない場合に、法による支配が必要とされるのである。知慧の本質はロゴスによるアイデアの分有であるから、いかなる場合にも臨機応変に妥当されるものである。法は個々の事柄についての規範であって、かかる規範の妥当しない領域が存在する。この法規範の妥当しない領域を充すものが術知（*τέχνη*）である。術知とは知慧の実践的なものであって、経験とロゴスとが混合して生じた正しい境見（*δόξα*）である。知慧のある哲人は知慧により、快刀乱麻を断つがごとく正しい統治をなすことができるが、哲人でない政治家にとっては、知慧による統治ができないので、その統治の準則として法規範が必要となるのである。法規範には無限に多くの間隙があるから、その間隙を充たすものとして、知慧には及ばないが、実践的効果としては、知慧のごとくに実効性を有する術知をもってするのである。知慧は純粋にロゴス的なものであるが、術知はロゴス的なものと経験的なもの、アイデア的なものと現象的なものとの混淆せるものである。知慧はアプリアリなるものであり、術知はアプリアリなるものとアポステリオリなるものとの混合したものである。純粋にアポステリオリなるものは単なる憶見であり、アポステリオリなる憶見にロゴスの加わったものが正しい憶見である。それゆえに術知は正しい憶見であるということができる。

〔註2〕 クラッベ（Hugo Krabbe）の近代国家理念（Die moderne Staatsidee）によれば、近代国家の理念は精神的権威が人格の権威に代ってきていることを示している。現在国民は自然人である人格者の支配下にあるのではなく、法規範、すなわち、精神的権威の下に立っているのである。かかる規範的権威は国民の意識のうちに、それへの遵奉の義務を感じしめ、自律的・自由意思的服従をなかしめるものである。これまで国家生活を導いてきた人格の権力は、正義の理念を内容とする規範的威力におきかえられてきたのである。このような規範的威力が、法の威力であって、法権威は国民の意識のうちに、法感情・法意識（*Rechtsbewußtsein*）を喚起し、国民の法規範に対する価値認識は、それに対する服従を誘発する。これまで法治主義の美名の下に、主権者として国民を支配した統治者は、実は法より独立した主権者ではなく、主権者たる法の媒介者に過ぎないのである。人が人を支配するのではなく、法が人を支配するのである。かくしてクラッベは、人格者の支配から国民を解放し、法による国民の自己支配を企図したのである。ここにおいて、法的権威と政治的権力とは分離されるに至ったのである。近代立憲主義国家においては、議会において定立された法が最高の権威をもち、あらゆる国家機関の活動を制約することになった。議会は法を生む媒介者であって、法自体に権威があるものであるから、法自体が主権者である。国家は法共同体（*Rechtsgemeinschaft*）である。国家は国民全体のための利益共同体（*Interessengemeinschaft*）として、国民各人の利益の充足に奉仕するのみでなく、正義の表現である法が支配し、法によって正義が実現される場所でないといけない。（拙稿政治学要論45頁以下）

〔註3〕 専制国家の政治的理念はルイ14世の「国家は、すなわち、朕のものである。」（*L'état c'est moi*）の思想において見られる。また、これは統治者の権力の絶対的恣意性を表明せる「かく欲するがゆえに、かく命ず」（*sic volo, sic jubeo*）の思想において見られる。一般専制国権とは恣意国家（*Willkürstaat*）とか、権力国家（*Machtstaat*）とか、警察国家（*Polizeistaat*）とかいわれるものであって、国家の意思は統治者の恣意によって決定され、統治権の行使も、統治者自らこれを行い、司法も統治者の名において行われ、権力の分立のない国家である。（拙著前掲50頁）

4. 政 体 論

前述せしごとくに、現実の世界においては理想国家の実現は不可能であることを知ったプラトンは、遂に第二国家として、次善国家たる法治国家を構想するにいたったのである。すなわち、法による人の支配（統治者が自己の恣意や権力によって国民を支配するのではなく）法規範の準繩によって国民を支配する国家をもって、現実には最もよい国家とせなければならなかった。それゆえに、統治者をして法をよく守らしめることが最も大切な統治の条件となるのである。プラトンは、君主と暴君との差異は法の遵守如何にあるとのべている。統治者が法律を遵守して国民を統治するときは、法をよく遵守する限りにおいて、君主と称することができる。統治者が法律によらず、慣習に従わず、法を破って、国民のためと称し、その実、自己の慾望を充たさんとして、自己の恣意によって統治するものが暴君である。（ポリティコス篇, 48a）

次に、プラトンは、統治者が統治を行う方法について、次のごとくにのべている。これはプラトンの政体論というべきものである。政体論においては、一には、統治者が何人であるかということ。他方統治者がいかなる方法によって統治を行うかということ、すなわち、法律に準拠して統治を行うか否か、統治権を分立して統治を行うか否か等について、分類されることができるのである。プラトンはこれらの要素を組合せて、六つの政体を区別している。

(一) 法治政体（立憲政体）（法による支配、法治国家）

1. 君主政体 (βασιλεία) 大善をなし得る。
2. 貴族政体 (ἀριστοκρατία) 中善をなし得る。
3. 民主政体 (δημοκρατία) 小善をなし得る。

(二) 恣意政体（専制政体）（統治者の恣意による支配、恣意国家）

4. 暴君（僭主）政体 (τυραννίς) 大惡をなし得る。
5. 寡頭政体 (ὀλιγαρχία) 中惡をなし得る。
6. 衆愚政体 (ὄχλοκρατία) 小惡をなし得る。

法治政体は次善国家としての法治国家において行われる統治の方法であって、統治者の数によって三つの形態に分たれる。君主政体とは法治国家において、統治者が一人である場合の政体という。この政体においては、統治者は君主一人であるから、いかなる善も君主一人の決意によって、法に準拠して、直ちに実践できるから、善と思うことは最も速に行い得る政体である。この一人の統治者たる君主が、君主の名に値する法律の遵奉者でなければならない。しからざるときは、君主は暴君と墮し、君主政体は暴君政体と化するからである。貴族政体は数名の優れた能力者によって統治権が行われる政体である。ギリシアにおける貴族とは、血統系の貴族ではなく、精神的能力的に優れた人物を指称するのである。魂が純潔で、ロゴスの眼の透徹した優れた能力を具有する複救人の人物によって、法に準拠して、統治の行われる場合に、これを貴族政体というのである。この場合においては君主一人の場合のごとくに、速かに善を実践することとはできない。複救人の貴族が合議して、意思の一致を見て、善を実践せねばならないので、君主政体のごとく思いきって善の実践ができないので、中善をなし得るものである。すなわち、一人の明君の場合のごとくに、徹底ができないのである。民主政体においては一般多数市民が交替して、一般市民の代表者となって、法によって統治を行うのであるから、常に一般民衆の求めるところに呼応して、法に準拠して統治を行わねばならない。それがために、一般民衆に逆ってまでも正しいと思うことでも実践することができない。すなわち、善の実践について、多衆の合議と一般

民衆の意思の忖度によって徹底して善の実践が困難となる。それゆえに、善の実践は極めて消極的・媚民的であって、単に小善をなし得るにとどまらざるを得なくなるのである。

次に、恣意政体とは、恣意国家において、法律に準拠することなく、統治者の自由意思によって統治が行われる政体をいう。恣意政体は自己の恣意によって統治を行う。統治者の数によって、三つの政体に分たれる。すなわち、恣意統治者が一人である場合を暴君政体といい、複救人である場合を寡頭政体といい、一般市民多衆である場合を衆愚政体という。暴君政体においては、暴君が自己の恣意のみによって、統治を行い、法によって暴君の恣意を制限することがないので、暴君は自己の利益のために、自己の欲することは、たとえそれが国民全体にとって、いかに不利益なことでも、自由に行い得る政体である。かかる政体においては暴君は国民全体にとって、いかに好ましくない大悪でも容易になすことができるのである。それゆえに、この政体は、すべての政体のうちで、最悪の政体である。寡頭政体は恣意によって統治を行う統治者が複救人存する政体であるから、統治者達の恣意を制限抑制する準繩としての法は存しないのであるが、複救の者が合議して、恣意の統一をはからねばならないので、各人の恣意は他の者の恣意によって制限を受け、個人の恣意のごとくに、無制限ではあり得なくなる。且つ統治者はすべて悪人という理でもないで、たとえそのうちに悪人があっても、他の者の意思によって掣肘をうける結果となる。それゆえに、暴君の場合のごとくに徹底した大悪を行うことができない政体である。従って、この政体においては、単に中悪をなし得る程度に止まる。更に、衆愚政体においては、一般市民が交替にその代表者の恣意によって統治を行うのであるから、その恣意の制限は、寡頭政体の場合よりも、一層強く且つ一般市民の意思をも忖度しなければならないので、思いきって、一般市民に逆って悪を行うということは益々困難となってくる。それ故に、衆愚政体においては、その恣意によって悪をなし得るとしても、ほんの小悪にすぎなくなるのである。すなわち、衆愚政体は悪に対して最も弱い政体である。

かくして以上の六政体を総合して見ると、1と4とは、権力が一人に集中される結果、善にも悪にも強い政体となる。2と5とは、権力が複救人に分割される結果、1と4の場合のごとく、善にも悪にも強い政体ではない。しかし、3と6のごとくにまで権力が細分化されないので、善にも悪にも3と6ほど弱くはない。それはそれらの中間的政体である。3と6とは、権力の細分化のために、善にも悪にも最も弱い政体である。それゆえに、消極的意味からいえば（大悪の除去という方面から）民主政体は最もよい政体であるといえることができる。しかし、大善を行うという積極的の方面からすれば、君主政体は最もよい政体であるといえることができる。それゆえに、大善を行い、大悪を避けるためには、君主政体と民主政体の混合政体が最もよい政体である。すなわち、民衆の制定した法律によって統治が行われる君主政体は、あらゆる政体のうちで最良の政体であって、人間の世界における神のごときものである。（ポリティコス篇, 52b）

5. 正義論

ギリシアにおいては、正義は永久に同一な事物の不変不易の本質たる自然の秩序に基づいて存するものであって、人定的のものではない。（ピタゴラス断片集）正義の本質は秩序と規律と調和であった。プラトンにおいても、正義は自然に基づくものである。人は生まれながらにして、それぞれの天分を有し、公共的人格として、国家に対する任務も、これによって定まっているのである。その任務をよく守ることが正義である。正義とは国民各自が自己の本分をつくすことであ

る。人間の魂の各部分と同様に、国家にも魂があり、各部分がある。国家は大型の人間である。国家の魂も人間の魂のごとく三つの部分から構成されている。

国家の魂	理性 (λογιστικόν)	哲人 (統治者) —— 知の徳 (σοφία)
	気概 (θυμοειδής)	軍人 (防衛・保安・行政) —— 勇の徳 (ἀνδρεία)
	欲望 (ἐπιθυμητικόν)	市民 (産業人) —— 節制の徳 (σωφροσύνη)

国家構成者の各階級は、国家の魂のそれぞれの部分を意味する。統治者は国家の理性である。それは国家の魂の最上の部分であり、魂を指導する部分である。それゆえに、国家の魂のロゴスとなる統治者は常に欲望にかき乱されることがなく、ひたすらイデアにあこがれて（エロースを感じて）イデアを看取して、知慧の徳を積み、この知慧によって、善き統治をなすことに専念しなければならない。国家の魂の気概を表わす軍人は、上に対しては、よく理性者たる統治者の指導に服し、下に対しては、欲望によって粗暴に陥ることなく、ひたすら国家の防衛と国内の治安の維持と統治の補助者として専念すべきであって、他のことを考えてはならないのである。かくして欲望のために粗暴に陥ったり、怯懦になることなく、よくその中庸を得た勇の徳を養うべきである。また、国家の魂の欲望の部分を表わす一般市民は産業人として、物質的生産の経済面を担当し、よく理性の指導に服し、欲望の赴くままに無軌道にはしることなく、過不足なく、その中庸を得て節度を守り、欲望を適度に節制するの徳を養うべきである。かくのごとくにして、国家の魂を構成する各部分が、それぞれの徳を養い、分を果すとき、国家の魂は統一・秩序・調和が生じ、ことに国家の正義 (δικαιοσύνη) が実現されるにいたるのである。(ポリティア, I, 16a 正義が実現するとき、国家は健全であって、国民全体が幸福になるのである。幸福とは神と偕にあって、それぞれの徳を行い、心が平安であって、法悦に充されている状態である。この点において、ベンサム、ミル等の功利主義的幸福論とその意味を異にする。ベンサム、ミルにおいては、国家活動の目的は最大多数の最大幸福であるといい、この場合の最大幸福ということは、最大限度に国民の欲望を満足せしめるという意味であって、国民を正しく指導して、魂の悦楽を得しめるという意味は存しないのである。この人間にして、この国家がある。国家の性格は、その国家のうちにある人間の性格から由来する。市民の現在が国家の現在である。よりよき人間を有しない限り、よりよき国家を期待することはできない。(ポリティア, VIII, 544c) かくして、国家における正義の実現は、国家の魂の各部分が、それぞれの徳を養い、よく統一調和を保つときに達せられるごとく、個人における正義の実現も個人の魂の各部分が、その徳を養い、よく統一調和するとき達せられることができるのである。

個人の魂	理性 (イデアを追求する) ——	{ 知慧によって、気概・欲望を指導する。 知の徳
	気概 (現象界に向う) ——	{ 理性の指導に従って、その所を得る。 勇の徳
	欲望 (現象界に向う) ——	{ 理性の指導に従って、その所を得る。 節制の徳

理性は常にイデアを覬覦して、イデア的判断力としての知慧を感得し、これによって、よく気概及び欲望を指導して、各々その所を得しめ、その適度を保たしめるものである。欲望は肉体を養い、生命を維持するものであるが、それがあまりにも肉体に執着して、時には理性に反抗し、理性の明鏡をかき曇らすがごとく傾向を有するものである。この欲望を抑死せしめることなく、よく中庸に節制して正しい方向に向かわしめるものは、理性の指導力であるとともに、また、これを実行する気概の力でもある。気概は理性と欲望との中間にあって、欲望よりもよく理性の指導に

服し、乱暴粗野に流れず、臆病に陥らず、欲望に屈せず、むしろ欲望を克服して、理性の指導に服するように理性に協力する働きをなすものである。心中の賊である欲望を破るのは理性の力であるが、気概が勇を奮って、理性が欲望を破るのを援助することによって達成されるのである。かくして、気概も欲望もよく理性の指導に服し、各々そのところを得て、それぞれ、勇と節制の徳を養い、魂の各部分が統一秩序を保ち調和するときに、正義の徳が実現される。すなわち、正義の徳はすべての徳の統一調和した全徳ともいふべきものである。かくして個人的正義は魂の各部分が、それぞれ、それ自身の分を守って、理性の指導にしたがって、その特殊の徳を発揮して、よく調和を保つとき、全徳正義が実現され、人々は幸福になることができる。幸福は淨い魂によって生まれる有徳な生活によって得られる。魂の各部分が円満に働くことによって魂は平安であり、魂の平安によって愉悦がもたらされる。魂が愉悦に満ちることが、また無上の幸福である。幸福は正義の徳によってもたらされるのである。

〔註1〕人間の行動は三つの源泉から流れ出る。それは理性・気概・欲望である。第一の理性は知性を有し、欲望の大目付となり、魂のパイロットである。他の二者の支配者であって、哲人たる王が、その国家を統治し、指導するに適する能力である。第二の気概は野心・勇気のごとき躍動する血流と勢力の源泉である。これは国家を守り、治安を維持する軍人に適する能力である。しかし、軍人がその武力をもって、統治者の指導に従わず、統治を独裁するとき、秩序は乱れ、調和が破れて、国家は破滅する。このことは、軍国主義政治が国家を破壊したわが国にもよく妥当する。第三の欲望は種々なる本能・衝動等の人間の精力の貯蔵所であって、これは産業人の物資の生産に適する能力である。しかし、産業人がその富を利用し、支配力を得て支配者となるとき、その国は墮落して、破滅に導く。このことは、ソヴェート革命、中国革命において、現実を経験されたところである。（ポリテΙΑ, IV, 434a）

〔昭和37年9月29日受理〕

References,

- Horn, Platonische Studien, 1900, S.358 ff.
 Kinkel, Geschichte der Philosophie, 1922, SS.200—208.
 Windelband, Platon, 1923, SS.63—83.
 Kafka, Sokrates, Platon und Sokratische Kreis, 1921, SS.114—120.
 Siegel, Platon und Sokrates, 1920, SS.101—106.
 Marck, Die Platonische Ideenlehre, 1912, SS.69—76.
 Wichmann, Platon und Kant, 1920, SS.23—52.
 Riehl, Plato, 1912, SS.1—35.
 Natorp, Platons Ideenlehre, 1921, SS.460—534.
 Barth, Die Seele in der Philosophie Platons, 1921, SS.49—62.
 Lutoslawski, Plato's Logic, 1897, PP.442—457.
 Taylor, Plato, 1927, PP.263—299.
 Bhandari, Studies in Plato and Aristotle, 1958, PP.135—152.
 Burnet, Greek Philosophy, 1914, PP.290—301.
 Spens, Plato's Republic, 1924.
 Appelt, Platon, Der Staat, 1923.
 Idem, Platons Gesetze, 1916.
 Barker, Greek Political Theory. 1947, PP.239—333.
 Gettel, History of Political Thought, 1951, PP.43—48.

Hignett, History of The Athenian Constitution, 1958, PP.175—192.

Windelband, Geschichte der Philosophie, 1924, SS.97—110.

Burnet, Platonis opera, IV, V, 1875.

Plato's Doctrine of Ideal State

Naoshige Imai

(Department of Law, Nara Gakugei University)

The aim of this treatise is to clarify the true meaning of Plato's doctrine of ideal state. Plato was not only a great philosopher, but also a political thinker and a highly ambitious person of politics. His dialogues, for instance, State, Law, Statesman, etc. clearly show this fact. Plato has an urgent desire to relieve the people of Athens of the willful and despotic government of ochlocracy. His sincere desire is to realize idee of justice in the actual, national life. So that, I want to make clear the conception of Plato's justice, and next explain the structure of Plato's ideal state, so-called greek polis state, and then the purpose of national government. The purpose of government, in Plato's doctrine, is to educate and cultivate the people as moral and cultured persons. So the ruler, that is, the governor should be the most educated and trained person. He must be a philosopher. This is generally called Plato's government, of philosopher. Plato wanted to put cooperative life into practice in his ideal polis state. So that, he is said as if he were a man of communistic idea. But he was not a communistic thinker. He was far from a communist, and in fact, he was a spiritualist and a lover of idee of kalos kai agathos. He loved, most of all, good, beautiful and purified spirit. He despised material goods, physical treasures. Communists, as a rule, love material goods, above all, and are interested in physical treasures. They are quite materialists. But Plato was not a materialist. He was entirely a spiritualist. He intended to make the people transcend the material wants. For material wants prevent the people from becoming moral and cultured persons. They are great hindrance to improving and establishing the purified personalities of the people.